

びわこの 考湖学

—第2部—

36

三十三所の観音霊場を巡る西国巡礼は、平安時代から現代に至るまで盛んに行われてきました。観音菩薩が三十三の姿に変えて人を助けることからとされ、皇族から民衆に至るまで広まった、観音信仰のひとつの姿でもあります。

の人たちの巡礼の苦勞が感じられるものが発見されることがあります。前回ご紹介しました、長浜市大辰巳町にある鴨田遺跡では、全国的にも非常に珍しい、室町時代の巡礼札が、村跡の溝から多数発見されました。

交通手段が発達した現在では、自動車・バスなどで気軽に行え、霊場寺院では朱印帳を持参した巡礼者を多く見かけます。けれど、観音巡礼が盛んになり始めた中世には、宿場や道路が整備されておらず、自らの気力と体力が頼み

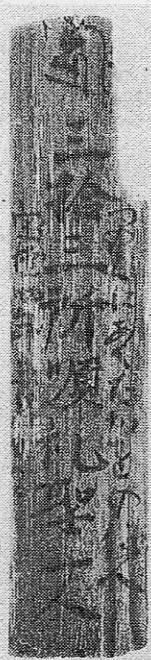
巡礼札は、長さ15〜24寸、幅3〜5寸の針葉樹の薄い板材の表面に「三十三所巡礼」と大きく書かれ、同行人数・年号・出身地・名前が書かれています。年号については、どういふわけか「宝徳4（1452）年」ばかりでした。

成し遂げられませんでした。時として、発掘調査では昔

出身地の記述をみると、江州や播州などの西国のほか、遠江や美濃など東国の記述もあ

長浜に残る巡礼札

巡礼札11



巡礼札18



り、巡礼の広がりをうかがうことができず。また「三十三所巡礼」と書いている札がほとんどでしたが、「西国三十三所巡礼」と書いているものもあり、既にこの頃には東

国でも別の三十三所巡礼があったことを示しています。なぜ多数の巡礼札がこの地から出土したのでしょうか。長浜の地は竹生島・宝厳寺へ渡る船が出るところであり、

悪天候で琵琶湖が荒れば竹生島へ向かう船も出航できません。天候に左右される、留まる場所もない、地続きでない霊場への道。巡礼道中においての難所の一つともいえま

す。そんな時、巡礼者たちが風雨をしのぎ、休息できる御堂などで一夜を明かしたとしたり、観音様への感謝と巡礼者の証しとして、そこに巡礼札を残していったとしても不思議ではないでしょう。このような巡礼者たちの道中の経験や思いが、残された巡礼札には込められているのではない

（財団法人滋賀県文化財保護協会 重田 勉）

観音様へ感謝と信仰の証し